

黒毛和種牛にみられた臨床症状を呈する好酸球性筋炎の1症例

東播基幹家畜診療所 丹波診療所

○田畑早智 永岡正宏 芹生朋美 門田文隆 今井正士

好酸球性筋炎は、牛と羊で稀にみられる筋炎で、臨床症状をほとんど示さず、食肉検査や加工の過程で発見されることがある。今回、皮膚に激しい搔痒感を呈する好酸球性筋炎を観察したので報告する。

材料および方法

症例は黒毛和種県外産肥育雌牛で2014年6月18日出生。11月3日激しい搔痒感と過剰な舐性行動による皮膚潰瘍のため求診。潰瘍部は腫脹し、周辺に大小不同の皮膚腫脹を複数確認した。患部は容易に脱毛し、剃毛するとしわ模様、皮膚の発赤と脆弱化を認めた。治療は、11月3日抗ヒスタミン剤投与、11月16日腸炎にて抗生剤と止瀉薬を投与した。12月7日皮膚腫脹は軽度となり、搔痒感はほぼ消失していた。11月3日に血液検査、11月13日に患部組織生検し病理検査、および12月7日に血液検査を実施した。

結果

1. 血液検査所見：11月3日と12月7日のASTは71、94 U/I、LDHは1,149、1,678 U/I、A/G比は1.09、0.87、白血球数は8,900、10,300 個/ μ l および好酸球数は178、412 個/ μ l であった。12月7日のCKは343 U/I であった。両日も好酸球増多はみられなかった。
2. 病理検査所見：肉眼所見では、断面が緑白色であった。組織所見では、筋組織は筋線維崩壊を伴い、筋線維間に好酸球が浸潤していた。また線維置換と、肉芽増生がみられた。筋組織に隣接する真皮深層と皮下組織に、好酸球浸潤を伴う結節性血管周囲炎を認めた。真皮浅層に軽度の好酸球性血管周囲炎を認めた。表皮に変化はなかった。

以上から、本症例は血管周囲性皮膚炎を伴った好酸球性筋炎であると診断した。

考察

牛において好酸球性筋炎を生前診断した報告は少なく、搔痒感を呈した例はない。本症例は、好酸球性筋炎に付帯した血管周囲性皮膚炎のため、痒みと皮膚腫脹が引き起こされたと考察される。本牛は12月7日には臨床症状が治まっていたことから、搔痒感と腫脹は一過性のものではあったと考えられる。しかし血液検査所見では、依然として筋損傷と炎症を示唆する結果が出ており、筋炎は治癒していない可能性がある。

好酸球性筋炎は、食肉検査や加工時に灰緑色の変色部として発見され、広範囲に及ぶこともあり廃棄となる。また食中毒を起こすザルコシステイスの関与が疑われているが、今回は明らかにならなかった。原因や予後は未解明であるため、本症例を食肉に供されるまで観察し病態を明らかにすることは、今後本疾病発生時の対策を検討する上で重要と思われる。